

中国語母語話者（台湾）の発想の違いから生じる日本語表現の誤り —「も」の使い方に関する誤用例から—

林 綺雲

要旨

日本語教師として長年集めてきた文例を分析してみると、台湾の中国語を母語とする日本語学習者が使う日本語には共通した誤りが出現している。たとえば、助詞の使われ方では、中国語〈的〉は「の」に当たると単純に理解されているように、中国語〈也〉も「も」に当たると当地の日本語学習者は判断する傾向が見られ、「も」の正しい使い方ができていない。

本稿では、「も」の使い方に関する誤用例を取り上げ、分析・考察し、当地の日本語学習者はなぜ「も」が正しく使えないのか、〈也〉の用法にどう影響されているのかなど、それらの誤用を生じる原因を探る。また、そうした誤用を引き起こさないための指導上の留意点も記しておく。

〔キーワード〕中国語〈也〉 中国語的発想 同一表現 日本語学習者

1、はじめに

外国人には、「は」と「が」の使い分けが難しいとか、「は」には主題提示や対比の用法があり(1)、そのため初級レベルの指導に困難が伴っているとか、日本の日本語教育学界では専ら「は」の学び方、教え方がよく問題にされているが、「も」の学び方についてはあまり論じられているとは言えないようである。実は、この「も」は台湾にいる中国語を母語とする学習者にとって存外難しい用法と言える。

中国語〈的〉は「の」に当たると単純に理解されているように、中国語〈也〉も「も」に当たると当地の日本語学習者は判断する傾向が見られ、「も」の正しい使い方ができていない。

本稿では、台湾の中国語を母語とする話者が「も」を使う際に誤る用例を分析し、なぜ「も」が正しく使えないのかを中心に、日本人が当然と考え疑問に思うことのない「も」の用法を考察する。

最初に、「も」と〈也〉の相関関係を明らかにすることにしよう。

Ⅱ、「も」と〈也〉は同一表現か

「も」の使い方を誤るのは、「も」を〈也〉に結びつけてしまうことに原因がある。文例①、②、③は台湾の中国語を母語とする話者がよく陥る誤用例である。

①Q：「竹葉青というお酒を飲んだことがありますか。」

A：「いいえ、飲んだことはありません。」

Q：「紹興酒は。」

A：「*紹興酒を飲んだこともありません。」（也没喝過紹興酒。）

②*東京の鈴木様もご来社を歓迎致します。（也歡迎東京的鈴木先生蒞臨本社。）

③*みんなが行かなくても、わたしも行く。（即使大家不去，我也要去。）

他の同類の事項を背景にしてある事項を取り上げる働きをする助詞を「取立て助詞」と呼ぶ(2)。「も」は取立て助詞の一つであり、「添加を表」したり、「ある物事がほかの物事と同様であることを表す」用法がある。たとえば、次のような例がそれである。

a わたしは竹葉青というお酒は飲んだことがない。紹興酒も飲んだことがない。（我没喝過竹葉青，也没喝過紹興酒。）

b わたしも行くから、待ってください。（我也要去，請等一等。）

c みんなが行けば、わたしも行く。（大家去，我也要去。）

d みんなが行かなければ、わたしも行かない。（大家不去，我也不去。）

このような例からは、〈也〉は「も」に該当すると思われるであろう(3)が、一概にそうとは言いきれない。〈也〉の用法は「も」のそれと全く同じという訳ではなく、〈也〉を「も」と訳せないことがある。

〈也〉の用法の一つの違いは、「も」は前の語句をうけるにすぎないが、

〈也〉は前の語句をうけるのはもちろん後の語句にかかることもある点にある。また、〈也〉は文の冒頭に位置することがあるが、「も」は冒頭に位置することはない(4)。

e 他没喝過竹葉青，我也没喝過竹葉青。——前をうけている
(あの人は「竹葉青」を飲んだことはないが、私も「竹葉青」を飲んだことはない。)

f 我没喝過竹葉青，也没喝過紹興酒。——後にかかっている
(私は「竹葉青」を飲んだことはないし、紹興酒も飲んだことはない。)

eの用例は「あの人」と「私」は並列されている。しかし、fの用例は「竹葉青」と「紹興酒」が並列されている。以上から、文例①の「*紹興酒を飲んだこともありません」は、「紹興酒も飲んだことはありません」とすべきであるのに、ほとんどの日本語学習者は躊躇することなく「紹興酒を飲んだこともありません」と考えてしまう。このような間違いは、明らかに「竹葉青」と「紹興酒」が並列されているのと、「竹葉青を飲んだこと」と「紹興酒を飲んだこと」が並列されているのを混同したことから生じていると考えられる。

次に文例②の場合は、どうであろうか。〈也〉が文の冒頭に位置することがある事は前述した。〈也〉は主に並列を表すが、〈也歓迎東京的鈴木先生蒞臨本社〉の表現のように、他にも同類のものがあることをほのめかして断定を避ける、婉曲な語気を含むこともある。このような場合には下記のg、hの例のように「も」と訳すことができない(5)。

g 也好吧。(まあいいでしょう。)

h 他反正也二十歳了，就讓他走吧。(彼はどうせもう二十歳だから、行かせようよ。)(6)

したがって、〈也歓迎東京的鈴木先生蒞臨本社〉は、「東京の鈴木さんのご来社を歓迎致します」と「東京の鈴木さんのご来社(を)も歓迎致します」のように〈也〉を全く訳さないか、「も」を「東京の鈴木さんのご

来社を」のあとに置き表現するとよい。文例②のように表現すると、〈也
歓迎東京的鈴木先生莅臨本社〉の意味にはならないのである。また、「
も」は前の語句をうけるだけであるので、文例②を見て「東京の鈴木様も
ご来社〔くだされば〕(7)歓迎致します」とすれば、原文の意図する意味と
は大きくかけ離れてしまう。

文例③も中国語を母語とする話者として、〈也〉の用法が潜在的に作用
した結果間違いを起こしたと考えられる。また、対比の「は」を使えない
ことも原因の一つであると思われる。例③を英語と中国語で表現すれば、
それぞれ「Even if nobody wants to go, I'll go.」「即使大家不去，我
也要去。」となる。明らかに「我要去」の〈也〉に引きずられて「私も
行く」と表現してしまったのである。以上から、ここでは「も」ではなく、
「は」と表現すべきであることがわかる。

先に〈也〉は主に並列を表すと述べたが、このことは〈也〉に接続作用
もあるということを意味する(8)。したがって、i、jのような文はもちろ
んk、lのような文も可能である。

i 大家要去，我也要去。

j 大家不去，我也不去。

k 大家要去，我不去。

l 大家不去，我要去。

i、j、k、l、の日本訳は(i)、(j)、(k)、(l)のようになる。

(i)みんなが行けば、私も行く。

(j)みんなが行かなければ、私も行かない。

(k)たとえみんなが行っても、私は行かない。

(l)たとえみんなが行かなくても、私は行く。

「も」の用法には「添加を表」し「ある物事がほかの物事と同様である
ことを表す」用法があるので、(i)と(j)のように「私はみんなと同じ行動を
とる」ことを表していると、「も」が使える。ところが、文例③では、
「私も行く」とは言えない。ここでは、「私はみんなと異なった行動をと

る」ことを表しているので、(l)のように取立て助詞「も」ではなくて、対比の「は」を使うことで「私は行く」と表現しなければならない。(k)の場合も同様、「私も行かない」ではなくて「私は行かない」と表現すべきである。

文例③の場合、なぜ「私も行く」は誤りであって「私は行く」でなければならないのであろうか。この問題は、中国語的発想である〈也〉の用法を離れない限り、そして日本語の対比の「は」の用法を理解していない限り、解答を出すことはできないだろう。

日本人は文例③の意味の文を中国語で表現する時、「即使大家不去，我要去。」としか言えないと、中国語に堪能な日本人の友人が教えてくれた。日本人にとっては逆に中国語〈也〉の用法が難しいのかもしれない。これは助詞というより構文にかかわる問題であり、「中日両語の構文の違い」として学習者を指導することが望ましい。

Ⅲ、結語—「似て非なり」に注意を—

以上、台湾で中国語を母語とする話者がしばしば陥る「も」の使い方を取り上げ、その誤りの原因を考察した。文例①、②、③はいずれも中国語〈也〉の用法に影響されて生じた誤用例であると考えられる。つまり、「も」と〈也〉を同一視したことに起因した誤りであることは明らかである。以上の分析から、〈也〉と「も」は「似て非なり」であり、〈也〉を「も」と直線的に結びつけるのは妥当ではないことがわかるのである。

中国語を母語とする私たちは、当然中国語の論理（発想）で思考し、会話をする。しかし、日本語を話し、表現する時中国語の発想から日本語の発想に切り換えなければ、以上述べた誤用を生じたり、中国語式日本語や不自然な日本語になる。

それ故、初級レベルで「置き換え」可能表現を教授する際には、教師は学生に日本語と中国語には発想の違いが存在することや使われ方が必ずしも同じでないことをまず指導しなければならないのである。

〔謝辞〕 本稿を執筆するに当たっては、国語国文学科の古田啓先生にはご懇切な助言、指導を仰ぐことができました。厚くお礼申し上げます。

[注]

- (1)「私は仕事で忙しい」のような「は」は、「は」の主題を提示する用法で、久野暉(1973)p. 27～35によると、「は」には、「太郎は学生です」のような主題を表す用法と、「雨は降っていますが、雪は降っていません。」のような対照を表す用法がある。前者は提題（主題提示）、後者は対比ということも多い。
- (2)学校文法で日本語の口語の助詞の分類は格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞の四種とする説や、終助詞から間投助詞を分離させ、副助詞から係助詞（「は・も・こそ・でも・さえ・すら・しか」）を分離させ、全部で六種とする説がある。「は・も・こそ」などの文中での取立ての働きを強調してこの一群の助詞を一括して特に「取立て助詞」と立てる説もある。宮田(1948)は、だいたい従来の係助詞に当たるものを取立て助詞と呼び、「句の一部を特に取立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である(p178)」と定義した。本稿はこれに従って「は」と「も」を取立て助詞と呼ぶ。
- (3)中国語の〈也〉は日本語の〈も〉に当たると書いてある中国語学習の専門書がある。参考文献 8 p204を参照。
- (4)参考文献 8 p204～206 を参照
- (5)用例g と用例h はそれぞれ参考文献 8 p206と参考文献 7 p85 から引用した。〈也〉の婉曲な語気を含む用法の詳細は参考文献 7 p86 ～90と参考文献 8 p206を参照。
- (6)用例h 〈他反正也二十歳了，……〉の場合の〈也〉は後の語句にかかっているので、「どうせ彼ももう二十歳だから、……」の意味の文ではないことに要注意である。
- (7)〔 〕の部分は筆者が補正した部分である。
- (8)参考文献 8 p206を参照

[参考文献]

1. 宮田幸一(1948)『日本語文法の輪郭』三省堂
2. 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
3. 高橋太郎(1978)『「も」によるとりたて形の記述的研究』国立国語研

究所報告62

4. 沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』に収録
凡人社
5. 岩淵匡ほか3名(1989)『日本文法用語辞典』三省堂
6. 松村明(1971)『日本文法大辞典』p328～330 「助詞」の項(山口良執筆)、p837～839 「も」の項(阪田雪子執筆) 明治書院
7. 畢永峨(1994)「“也”在三个話語平面上的体现:多義性或抽象性?」
戴浩一、薛鳳生主編の『功能主義與漢語語法』に収録 北京語言学院出版社
8. 望月八十吉、高維先(1970)『中国語学習のポイント』光生館
9. 奥水優(1985)『中国語の語法の話—中国語文法概論』中国語研究学習
双書8 光生館
10. 鈴木一彦・林巨樹編集『品詞別日本文法講座—助詞』明治書院